

一 政治への胎動

三年余りも秘書官稼業をやつてきた私は、どうも事務官の仕事が最早自分に合わないような気がしてならなかつた。人間というものは誰でも自分の境涯に満足とまで行かないまでも、ある種の諦めによつて現在の境涯を肯定しがちなものだ。だから秘書官という政務官の仕事から正常の事務官の仕事にかへつて行つたとしても、事務官は事務官としての何とかその中によさを見出してやつて行けるに違いない。そうも考え直して見たが、私の場合は素直に事務に帰つて行く気がしなかつた。それというのも男として何か自分の活力を十分生かしきるような破天荒の冒険がしてみたかつた。現状に対する倦怠感を打破して、自分の生命を思う存分燃焼させてみたかつた。そういう衝動がどうも秘書官を廃めた私をして、正常な事務の領域に復帰せしめなかつた一つの素因であつた。

又反面、自分の後半生の行き方についてつくづくと考えてみた。元來行政官というものは上りが早いものである。どんなに永く勤めてみても五十歳まで行政官をやるといふことは、日本においては稀有の例である。どうせ中途半端で再び娑婆に投げ出されるに違いない。それも戦時中の

ように政府や官僚の勢力が強い場合においては、退官後その余勢を駆って何かの仕事に天降りがきくのが例であつた。しかし今日の時勢では世の中は官僚に対してそう甘くはない。何時の日か自らの力で自らの運命を切り拓いて行かなければならなくなる。そうした場合、自分としてどういふ分野に後半生を託するようにするかについては、自分なりに考えざるを得なかつたのである。

ところが実業につくといつても、これには殆んど自信がもてない。省議に参列する大蔵省の次官や局部長連中の顔をつくづく眺めてみても、今この人達が官職を離れて裸で銀座の街頭に抛り出されたとしたら、果してこの中何人が自らの力でその生活の道を開拓して行けるだろうかと考えてみると、どうもこの人こそは自活できるに違いないと折り紙をつけれそうな人は殆んどいない。文筆人として立派にやっけて行けそうな人はいなくてもなかつた。前の大蔵次官の長沼弘毅さんなどはたしかにその稀有の例であつたが、誰もそういう天分に恵まれているものではない。況んや私ごときものには到底齒が立つ仕事ではなかつた。と云つて僅かの恩給を頼りに隠棲する程の世捨人になるには、まだ血の気があり過ぎる。そういうた事情が私を政界に進出させるもう一つの素因をなしていたといえよう。

然らば政界に出るといふことはどうであろう。それも一つの道には違いない。それにしても第一政治という仕事ほど激しくけわしい仕事はない。それはきびしい日常の闘争を意味する。細い

綱の上を渡るような仕事である。薄氷を踏むような芸当である。ほめられるよりは悪口をいわれることが多い。家庭を犠牲にする覚悟がなければならぬ。悪口を叩かれ頭を万人に下げながら渡世をしなければならぬ。それに選挙という困難で金のかかる関門を、しょっちゅうくぐらなければならぬことは、何としてもおつくうなことである。それも大臣というような栄職に近い将来約束されているのであつたら、人によつては、その困難も敢て忍ぶこともできようが、これこそ政治家にとつては正に狭い門である。こう考えてみると、政治家というのは跳びつく程よい仕事でない許りが、思慮深く自分の分限をよくわきまえた人であれば決してこれを選ぶに潔しとしない仕事である。自分の性格を分析してみても在来の政党政治家のようなコースを踏む自信が果してあるかどうかと反省してみるが、どうも確たる自信がもてそうもなかつた。

とは言うものの、政治という職業は人間社会における最も本源的なものである。人間は政治的動物だと言われている。凡てのことの始めに政治があり、凡ての社会的営為を貫いて政治があるのである。従つて又政治家という公職はなければならぬし、誰かがこれをお引受けしてやつて行かなければならないことも判りきつたことである。そして今日政治家の職業は王者や一部の貴族の特権ではなく、万人に開放された公職となつてゐる。それは厄介で困難で割に合わないものだから、誰も政治家にならないのだということになればそれは大変なことである。といつて身の

程を省みないで無闇に政治家になりたい野心家許りが出てきても、これは国民にとってまことに迷惑である。そこでふりかえつて一休在来の政治家と自分とを較べてみて、自分が果して彼等と同等あるいはそれ以上の仕事が行けるかどうかを考えてみると、手前味噌かも知れないが、その位のことにはやってやれないというわけのものではないという、ほのかな自負心が湧かないこともなかった。

それに大きく言えば、われわれがこの国に生を享けてからの日本の国運というものをふり返つてみると、善きにつけ悪しきにつけ、一切の事態の経過は、つまるところ政治の責任に帰するということが言える。政治がしつかり大地に足をつけて公正妥当な大道を中外にわたつて踏み外すことがなければ、こうした国家の悲運と民族の悲劇を招くことはなかつた筈だということは確かに言えることである。政治家が私利と私欲に走らないで、天下のことを第一に考え、護身に憂き身をやつさずに勇気を以て言動するだけの用意があつたならば、国家の危局を回避し民族の窮乏を救うことができたであらうにと惜まれる。今日は又、明治維新以上の変革期であるのだから、これからの国政のかじのとり方というものは、国家の運命にとつて重大な関係があることは否めないところである。今日のように政治という職業が大切である時代は滅多にないと言える。政治家の責任が今日ほど重い時代はないとも言える。一身を政界の激流に棹さして、己が生命を燃焼

しつくすことは正に男子の本懐であろう。

そのようなことを彼は考え廻らしている間に、月日は遠慮なく経過していつて、何とか決断をつけねばならない破目に追込まれて行つた。ところが偶々昭和二十六年八月、私は池田大蔵大臣の配慮で三カ月ほど米国に出張することになった。池田さんとしては、自分の身边に私がないことによる不便を忍んで、極力私に外遊を勧めてくれ自らその手配をとつてくれた。唯彼は私にどうして外遊させようとするのか、つまりその目的については一向に明かさなかつた。「講和会議もありいい機会だから行つておいで」と言われただけである。「何時立つのですか」と聞きただせば「これから一週間もすれば立つてはどうか」と言われた。そこで私は急いで旅装を整えて、八月十三日、羽田空港を立つて渡米したのである。十月下旬に帰国してみたら、当の池田さんは「もうこれから大蔵省の方の仕事は心配しないでよいから、できるだけ郷里に帰つて、郷里の人々と顔馴染になるんだ。何時衆議院は解散になるか判らんよ」と念を押された。そこで私は、始めて池田さんが私を渡米させた真意をよみとることができた。当初、池田さんは「君は政治家になつてはいけない。君のような型の人物は官界に乏しいのだから、自分としては君が大蔵省に残つてくれることを希望する。絶対に政界進出などを考えてはいけない」とよく言いふくめられていた。私は彼のこの豹変に驚いた。

代議士当選と同時に大蔵大臣となった池田さんは、もともと政界の事情に暗かったし、後進に政治をやらせたい等ということは考えなかつたらしい。ところが激しい政界に身を置いてみると、官僚的な肌合では政界渡世ができるものではないし、親身になってくれる同患共苦の政友がほしくなってきたのではなからうかと思われる。こういうことが直接の機縁になって、私はとうとう政界進出を決心したのである。私の同僚秘書官の黒金泰美君や宮沢喜一君等の政界進出も、これと同巧異曲の経過を辿ってからのことであつたらうと思う。(昭、二八・八)

二 選挙とその前後

いよいよ政界出馬を決心したものの、一向に解散になる気配はない。吉田首相は講和締結に伴う跡始末まで、この際一気にやつてのける決意でいたようだ。といつて政治は水物、何時解散になるか判らない。近いようでもあり遠いようでもある。このように半殺しのままで置かれるといふのは、われわれにとつて決して楽なものではない。早く解散があつて欲しいといふ私の心理は、入隊した兵隊がなるべく早く戦地に行つて実戦に参加してみたいといふ心理と一沫似通うものがあつた。池田さんは私になるべく田舎に帰るようにといつて勧めてはくれたが、田舎に帰るとい

つてもそう無闇に帰れるものではない。東京でやり遂げなければならぬ仕事は山ほどある。それに田舎に帰って一週間行脚したとしたら、その間に依頼された諸々の仕事に一応の結末をつけるためには少くとも一カ月はかかる。又帰省に際してはどうしても多少の経費がかかる。こういうことをこれから一カ年もやらねばならぬとしたら、それは大変なことであると思った。私は身勝手にも一日も早く解散になることを希望していた。ところが昭和二十七年の八月末衆議院はいよいよ解散されて、総選挙戦は九月五日から戦われることになった。その九月五日私は退官の上、六日立候補の届出を了えて、初陣の選挙戦に出陣したのである。

選挙ということは私にとつては始めてのことであるから、布陣の一切は人任せにしてこれに介口することはなるべく避けた。又介口するだけの経験はもとより知識の持ち合せもなかった。唯私は敵を誹謗するようなことは絶対しないように一同にお願いしておいた。そしてこれだけのエチケットは最後までどうにか皆んなによって守っていただけかと思っている。又私は自分で確信がもてることだけを演説の中で言つたつもりである。人間であるからその言動に多少の誇張や虚飾のあることは、偽悪者でない限り或程度避けることができないことではあるが、なるべくそのようなことのないように心懸けた。私は私の属する自由党の選挙公約というものに精通していない許りか、それに興味をもっていなかった。

私の演説はインフレーションを抑制して通貨の価値を維持することが、経済発展の基盤であり道義確立の基礎であり社会秩序維持の前提であるから、このことが政治の職責のうちで一番大切なことであることを力説した。そしてそのためには、お金を大切にするというよい慣行が国民の間に根強く打立てられなければならない。政府がよけいに金を国民から巻き上げるよりも、減税によつて国民の懐になるべく多くのお金を残すような政治を行うことが、その目的を達する一番有効であり適切な手段である。従つて財政の緊縮整理を断行して、安くつく政府（Cheap Government）をつくつてゆかなければならない所以を強調したのである。つまりいわば古典的な財政経済の理論を耳馴れない田舎の人々の前でやつてのけたのであるから、私の演説は一向に人々の反響を呼び共感をかちとることができなかつたように思う。拍手をしてくれる場面も殆んどなかつた。中には大きい口を開けてアクビをされる老人もいた。それでも私は決してそのペイスを変えるようなことをしなかつた。目先の御利益を誇張的に宣伝して、有権者の歎心を買うようなことはいやしいことであると思つた。国民の良識がいつの日か厳正な審判を、かかる言動に下すに違ひあるまいと思つていた。民主主義というものは、国民の良識を基調にもっているのだから、もし無責任な煽動が勝利を民衆の中に永久に打立てるようなことがあるとしたら、私はむしろ私の方から民主主義との絶縁をも敢て辞さない積りだ、という氣負つた氣持をもつて、自分

自身に言い聞かせていた。

私は選挙民の中に立っている候補者としての自分を意識した、又この人々が自分の敵であるという同僚候補者と対決せる自分の姿をも意識していた。しかしその意識は、どちらかと言えばおぼろなものであった。敵に対する闘志というものは殆んど湧かなかつた。むしろ私は選挙戦というものはどうも人との戦いであるよりも、より多く自分との戦いではなからうかと反省していた。自分に勝ちきることができたら、必ず選挙戦にも勝てるにちがいない。私が選挙に勝つためには、先ず自分の内奥に潜む矯慢と怯情に打ち勝たなければいけないのだ。あるいは自分にしよつちゅうまとわりついて離れない羞恥心と退嬰心を取除き、短慮と投げやりの心を清算しなければならぬのだ。私はこういう心中の敵と絶えず闘争していたのである。山中の賊は破り易いが心中の敵は破り難い、というのが先哲の述懐であるが、私も自分との戦いにおいてこの苦闘を重ねたのである。戦いを進めるに従つて自分の敵は愈々打破り難いものになってきた。しかしこうした闘争は、何も一回の選挙戦でけりがつくものではなく、それは一生を通じての課題である。私は選挙戦を通じてその試練を集中的且つ反覆的に体験させてもらったことを、省みて俸せであつたと考えている。これからの選挙も、私にとっては、他の何であるよりも、先ず自分との対決であるに違いないと思つてゐる。

私の同僚候補者佐野増彦君がいみじくも喝破したように、私もまた「選挙自体が即ち政治である」と思った。あれだけの選挙民を前に自己の所信を述べることができるといふことは、大変なことである。この選挙を通じて国民の政治意識はぐんぐん伸びて行く。選挙は従つて立派な政治教育の場である。選挙は政治への階梯ではなくて、むしろ政治それ自体である。この選挙をどう闘うかということによつて、政党や政党に属する候補者が評価される。信用の度合が決められる。又選挙を通して国民の意志が具体的に表明される。それだけではなく、更には、選挙の闘争を通して国民の意志が形成され洗練され具体化される。選挙は勝敗優劣を争うスポーツではなく、選挙自体がその闘争過程を通して政治を生産して行くのだ。又候補者は、この選挙を通して自分を錬磨すると共に、自分自身の人格を具現して行くのだ。従つて「選挙は人なり」ということにもなる。そういう意味で政治を新たに生産してゆこうという選挙は尊いものであり、人格の具現である選挙はいわば聖いものである。一切の虚飾を排し、総ての卑屈を退けて、堂々と闘うべきものである。私は自分の選挙を通じて、しみじみとこのことを感じた。

それにしても、選挙というものは、随分の経費と労力が要り、同時に大きい感情の浪費があるものである。まさかと思つてやってみると、矢張りひどい犠牲が要るものだ。選挙がすんでしかもこれに勝利を得たのに、何かしら心の底から湧き出る愉悦を覚えなかつたのは、こうしたこと

に因るのであろう。公明選挙というのは、この魔力的現実の滔々たる激流に対するささやかな抵抗ではあるが、果してどれだけ実効が上っているものか疑わしい。その罪は往々にして国民の政治意識の低調さとか、道義の頹廢とかに帰せられるが、しかし最大の罪は候補者自身の勇断の欠如に帰せられなければならない。正を踏んでおそれない勇断の欠如である。佐野増彦君が選挙の粛清ができれば政治は自然と立派なものになるといわれたのは蓋し名言である。それには候補者の勇気と選挙民の協力が大切である。一気に公明選挙を実現するというのは、なかなかむずかしいことである。しかし日本の政治をよくするためには、何とかして実現しなければならぬことである。そして一步一步、私は私の選挙がこの目標に近づいているものと確信して、けわしい山道を登って行っている。(昭、二八・八)